

報



會

會 岳 山 本 日

15

月 五 年 七 和 昭

大菩薩の山々

松井 幹雄

水道橋のほとりにある学校の朝のことである。西窓の教室に今日はどうかと思ひながら三階に上つて行く。いふまでもなく富士から大菩薩雲取の面々が、麴町から牛込への高臺の麓を越して見えるときには朗かな氣持である。更にガランとした屋上に上つて溢れるやうに注いでゐる日光を浴びながら、兩手をポケットに入れて、さと思ひ直して山を眺める。

まつたく好い氣持である。屋上の塀に靠れながらチツと見詰めてゐると、天狗棚山から狼平へのあの立木の一本一本が手にとつて見るやうである。春になつてこの茅戸の雪が消えると、さあこつちの天下だなと思ふ。雪があつたつて恐れやしないが、このあたりではない方が氣持が好い。

まつたくあの五千尺から六千尺にかけての芽の出るよきの氣持は格別だ。下の方から段々に緑の色が薄れて来て、今自分の坐つてゐるところの木々の芽は未だ固くて、下界の者共の慌しさを嘯いてゐるやうである。ああ山に行きたいな。

思へば大菩薩も變つたものだ。武田さんが『山岳』に『新聞』に紹介されて以來、登山するものは年々殖え、最早探られないところはない迄に、(無論これは登山者としての立場からである)幾多の足跡線が引かれ

てしまつた。加ふるにあの長編小説の影響を受けて、登山家乃至は探山家以外の人達の好奇心を唆つて、多種多様の人が出かけたものと察しられる。

又一方には武田さんの後を受けて小名、古名の研究者、蒐集家が現はれて、中には病膏盲の鉢のものなではない程になり、果は玉石混淆の傳説を鵜呑みにして、その儘發表する熱心家も出現するやうな盛況である。

この山地を略半周する中央線の機關車が六輪聯結から八輪聯結のテンダー式となり、更に遂に電氣機關車に變つてからもう一年になる。

乗合自動車も鹽山から番屋まで定期が通ひ、日歸りの登山者には一方ならぬ便宜を興へてゐる。更に柳澤峠を越して落合まで行つて呉れたら、大菩薩のみならず秩父へ行く連中も随分助かることだらう。又一方御嶽から氷川のパスも、一層のこと丹波山まで延ばして呉れるとよい。

然し丹波山と落合との間は當分の間靜かにして殘して置いて貰ひたいと思ふのである。あの位の深く逼つた大きな溪の一つ位は、昔のまゝの靜けさを是非保存して置きたいものだ、希望する次第である。先年二條の電線を引いてゐるのを見て、やむを得ないことだと考へたが、然し惜しいことだと思つた程だ。

其他眞木や葛野に入るパスは、うまく利用することが出来れば拾物といふ程度に過ぎない。終列車で早曉

停車場から眞暗な麓路を歩くのも好いものだ、これが山にかかるところまで車を利用することが出来たらば、どんなによいことかと常と思ふところである。

よくこんな連中がある。何處何處の山は實に氣持が好い山だから是非行つて見給へ。實に好い、それに麓の人も純朴でねーといつたたぐひ。この連中は少し多勢その山に登り始めると、君はあんな山に行くんですかといふ變り方、豹變も甚しい有様だ。大菩薩にもこんな手合が多くなるやうである。人が煩さかつたならば人に云はねがよし、更に惡口を云ふに至つては言語同斷である。

大菩薩の山の中では何といつても、大菩薩峠の附近が一番氣持の好い處だ。今に小屋が出来て屹度日曜日あたりには相當の繁昌ぶりを見せることであらう。さうするとあの連中は又大菩薩の山一杯に小屋でも出来たやうにシカメ面をして俗化俗化と騒ぐことであらう。古くは三峠山にも、近くは陣場山にも小屋が出来た由であるが、三峠山から見ると富士の姿にも變りなく、あの屏風岩の巖壁にも變りはない筈である。

大菩薩峠に假りに茶店が出来たり、大燈明臺が立つたりしようとも、この山中が公園地になる程の開け方は斷じてしまふと思ふ。相變らず茅戸の果や黒木の生茂つた上に富士の美しい山容を望み得て、浩然の氣を養ふことが出来ようといふものだ。

大菩薩の山を繞る山裾にある宿屋

として嵯峨鹽の湯宿、小菅村の役場附近にある三四軒の宿、丹波山村の野村屋、小河内の鶴ノ湯の都留屋などはよく知られた宿だ。

これらの宿の印象も決して人と人だけの關係でなく、山そのものの中にまで滲み入つて行くものだ。

丹波山の野村屋などまつたく氣持の好い宿だ。又あの村の氣分、然しこれは交通の不便さが齎す賜物なのであらうが。或る秋の朝のこと、丹波山の柿の色を思ひながら雨上りの路を歩いて勤めに行き、歸つて來るとこの宿から山葵が届いてゐた。早速青い奴を磨り卸して見て、その強い香氣にホロリと一雫落して朗かに笑つてしまつた。わざと茶代も置かず氣儘に振舞つて歸つて來たのにすまないと思ふ。

大菩薩にも鹽山口に山彦會、眞木に雁南會、葛野に七保山岳會、丹波山村にも何とか、夫々保勝會が出来たやうである。保勝會とは名詮自稱、山々を美しくする會と信ずるが故に、益々その發達を期待してやまない。大菩薩の山々について何か書けるとのこと、御受けはしたものの長い間ひどく苦にしながら、漸く春の日本に筆をとつたところが、本論に入らない内に雜談で終つてしまつた。誰かに本論を書いて戴くことにして筆を擱くことにしよう。



會務報告

五月五日定例理事會報告

出席 評議員五名 理事十一名

一、山岳廿七年一號編輯報告並びに二號の原稿につき報告あり。

一、山小屋建設地に關し松本營林署への回答につき協議せり。

一、山小屋建設資金、其他詳細の具體案を協議するため小委員會を開催することとす。

一、本年度山日記編輯報告ありたり

一、六月小集會開催のこと。

一、内外登山團體の徽章を蒐集することに決定。

一、財團法人申請につき報告あり。

以上

圖書基金に關する報告

本誌第十三號にて本年度圖書基金募集を發表したるに多數會員諸賢より御申込を得た。圖書係の名に於て茲に謝意を表する。五月十日迄の分左の如し。

圖書基金申込會員氏名

東京

小島 久太(三〇)高木 伊八(三〇)

飯塚篤之助(二〇)高頭仁兵衛(二〇)

柴田 潤藏(一〇)大橋 進(一〇)

加藤 保二(一〇)大谷 光明(一〇)

石塚秀次郎(一〇)高橋良之助(一〇)

吉田 竹志(一〇)細川 加茂(一〇)

若林祐次郎(一〇)林 悌助(一〇)

酒井 忠一(一〇)山内 二郎(一〇)

辻本 満丸(一〇)高野 鷹藏(一〇)

三枝 守博(一〇)冠 松次郎(一〇)

中村清太郎(一〇)島山 悌成(一〇)

藤島 敏男(一〇)伊藤秀五郎(一〇)

松本 善二(一〇)松方 三郎(二〇)

大阪 今村 幸男(一〇)

京都 田中喜左衛門(二〇)

神戸 別宮 貞俊(一〇)

滋賀 井花伊左衛門(一〇)

札幌 岡本 三男(一〇)

計三十一名 三十九口

六月中國書室夜間開室日

一日 藤島 三日 英木

六日 伊藤 二十日 島山

八日 神谷 廿二日 角田

十日 横 廿四日 浦松

十三日 松方 廿七日 渡邊

十五日 松本 廿九日 藤島

十七日 田中

右の外毎週火木土の三日間と第一第三の日曜日は午後一時より午後五時まで開室しております。

山岳バックナンバース委託販賣

本會圖書室に於て販賣してゐる山岳バックナンバーは、今度會員諸氏の御便宜の爲、神田區神保町の巖松堂書店に於ても販賣致す事となりし。但し販價は從來發表の通りであります。

新着圖書

Ladies' Alpine club year Book 1932.

The Geographical Journal

VOL. LXXXIX No. 3-4 March-April 1932.

The mountaineer VOL. XXIV

No. 5 Apr. 1932.

La montagne C. A. F. No. 238

mars 1932.

Sierra club Bulletin VOL. XVII

No. 1 Feb. 1932.

Bulletin del Centre Excursionista

de catalunya C. A. C.

VOL. XLII No. 441 Feb. 1932.

Club Alpino Italiano Rivista

mensile

VOL. LI No. 2-3 Feb-marzo

1932.

Bulletin del Centre Excursionista

de La Comarca de Bages

ANY XXVIII No. 159-152.

gener-marca 1932.

Bulletin Appalachian mountain

Club. VOL. XXV No. 7 Apr. 1932.

The Prairie Club Bulletin

No. 215 Apr. 1932.

The Journal of the mountain

Club of South Africa. Being

number Thirty-Four for the

year 1932.

Natural History VOL. XXXII No. 2

mar-Apr. 1932.

Revue Alpine C. A. F. VOL. 33

No. 1 1932.

Trail and Timberline No. 162

Apr. 1932.

Die Alpen. Les Alps. Le Alpi

VOL. VIII-No. 4 Apr. 1932.

關東山岳會々報 第九年三號

臺灣山岳叢報 第四年四號

臺灣山岳會

マデスリヤン 第一三九號

關西徒步會

山の旅 第二十七號

山の旅會

廣島山岳會々報 昭和七年四月號

アルカウ趣味 第十九年五號

日本アルカウ會

踏跡 第五號

東京登山旅行會

本邦に於ける體育運動團體に關する

調査(昭和七年度) 文部省體育課

明峯 第五號

明峯山岳會

管見錄 第八年四號

大阪管見社

山行案内第七年五號

昭和マウント倶楽部
旅行 第七十四號

東京旅行クラブ
山 第二十七號
山 第五十五號

東京山彦山岳會
日本登高會々報 第八號
東京登山歩流會々報 第三年五號
R.S.C. 部報 第五號

リユックサツクラブ
朝鮮山岳 第一號
神戶アユモ會々報 第二十三號
旅 第十二年四・五月號

東京アルカウ會
山小屋 第六號
登山とスキー 第八號

朋文堂
山と溪谷 第十三號
霧の旅 第一年三號(再版)

購入圖書

新潟縣山林會編
銀山平と尾瀬沼 大正一四年版
小泉秀雄著

大雪山、登山法及登山案内
志賀重昂全集 全八冊
大正十五年版

寄贈圖書

笹森儀助著 千島探検明治二六年版
原田、杉山共著
世界探検全集日本篇 昭和六年版

以上松方三郎氏
小西和著 日本の高山植物
明治三九年版

以上伊藤秀五郎氏

AGENDA-ALMANACH DU
TOURING-CLUB 1932.

以上日高信六郎氏
地震 第三卷第十二號第四卷四號
以上木村鑑吉氏



圖書紹介

一九三二年度山日記内容

一、記入欄
屏、登山経歴欄、自由日記欄、方
眼紙、住所欄
二、記事

登山の注意(一般的のもの)

(松方)
冬期登山に就いて
スキー登山の注意

(伊藤)
服装と用具及食料
登山用品表

(松方)
應急手當及び登山衛生
本邦主要山岳高度表

(渡邊)
(本暮)
本邦主要山岳高度表

(地方別、標高順に改訂)
外國の高山、峠
本邦主要峠(朝鮮臺灣を含む)

(木暮)
山小屋、山案内
日程表 (田中、神谷、角田)

(角田)
山岳語彙(日本及外國)
山岳文獻抄 (神谷)
全國警林署、帝室林野局出張所

在地、全國登山團體名簿、其他數
篇、山岳寫真八葉

定價壹圓(會員二割引)

三年目の編輯であるから大した骨
折もない事と思つてゐたら、色々と
組替え、訂正、増補等があり、係一
同は大奮で努力してゐます。五月下
旬には装釘をはじめ、内容一新した
山日記が發行されます。

山日記の會員割引に就て

昨年通り山日記の會員割引を致し
ます。一日も早く御申込み下さる様
會員諸氏へ御願ひ申し上げます。

定價一圓、送料一部六錢
會員二割引送料共八拾六錢

申込 六月十五日迄
申込先 本會事務所又は圖書室

備考 振替東京四八二九番を御利
用願ひます。送金は申込と同時にこ
と、期限後は一切割引致しません。

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分一地形圖 修正

白河十三號 長沼 一面

日光三號 鹽原 一面

水戸八號 鉾田 一面

同 十六號 土浦 一面

同 五號 草津 一面

同 六號 輕井澤 一面
同 七號 御代田 一面
五萬分一地形圖 鐵道補入
靜岡十五號 家山 一面
飯田十四號 下呂 一面
豐稿三號 秋葉山 一面
二萬五千分一地形圖

前橋及高崎 傍一號 鼻毛石 一面
同 十三號 榛名湖 一面

二萬五千分一地形圖 修正

宇都宮近傍十一號 谷田貝 一面
水戸近傍 二號 太田 一面

甲府近傍 十九號 鰍澤 一面
二萬五千分一地形圖 鐵道補入

札幌近傍 九號 茨戸 一面
四日市近傍 八號 日永 一面

昭和七年四月三十日

五萬分一「金峯山・三峯」新版

長いあいだ奥秩父の山旅の指針で
あつた兩圖幅の新版が發賣された。
一瞥して氣付いた點を掲記しておく
イ雲取山から金峯山まで幾々十數里
に及ぶ山脈全部に縦走路ともいふべ
き點線路が記入された。

ロ大洞林道、同惣小屋支線、將監峠
道、瀧川林道、雁坂林道、股ノ澤林
道、雁峠道、甲武信岳登山路、瑞橋
山登山路など新たに記入され、從來
登山者を迷はしめた金峯山信州側
登路も訂正された。十文字峠、雁坂
峠の道が點線路を以て記載されるに
至つたのは之等の峠の歩行者によつ
て利用されることの益々少なくなつて
ゆくのを物語つてゐる。

ハ武州雲取小屋、雲取小屋、惣小屋
釣橋小屋、笠取小屋、柳小屋、荒川
小屋、甲武信小屋、國師小屋などが
記入された。しかし將監峠、西澤東
澤の落合、京ノ澤などにあるもの、
破風の小屋、大日小屋、十文字峠の
小屋など追加記入すべきものは少く
ない。

(二)唐松尾山、三寶山の二つが記載さ
れた。大洞山は別名を附記された。
牛王院山は削除されて牛王院平に低
下した。何だか惜しいやうな氣もす
る。破天山は依然としてその儘であ
る。山貌の破風に似たるより起れる
山名なる以上當然改められるべきで
はなかつたか。三寶山を記入するな
らば木賊山もほしい。和名倉山の白
石山も訂正されてゐない。

ホ澤の名の新記入は三條澤、木賊澤
股ノ澤、東股澤、西股澤などあるが
如何なる標準の下に追加されたもの
なのか?之等の澤名を記載するなら
ば序にまだ「記入してほしい澤の
名が澤山あると思ふ。」

(ハ)金峯山附近は甲州側信州側共に地
形が大幅改正された。實測に基くも
のであらう。實測ついでに笛吹川西
澤東澤のやうに瀧の多い谷にはその
記號が入れてほしい。眞の澤木賊ノ
瀧などもさうである。

(ト)秩父鐵道が猪ノ鼻の近くまで延び
てきてゐる。便利になつたものだ。
チ以上に掲げたものの外にまた細か
い改廢は尠くない、例へば日原の奥
の白石神社が天祖神社となり、大洞
川に烏帽子岩の字が除かれ、増富の
金泉湯がラヂウム鐵泉地となり、笛
吹川上流に子酉川の文字が削られた
如きであるがこの邊で切ることにな
しやう。

附記 以上のやうに登山者からみ
ればまだ「望む所は尠くないので
あるが、前記の如く多くの林道及び
山徑の記入されたことのみを以てし

てもこの兩圖の新版は關東に住む秩父黨を充分喜ばせるに足りるであらう。

落葉松の新緑の六月に、ほの暗い深林の中にうす白く石楠花の咲く初夏に、白樺の紅葉の燃えさかる秋十月に、奥秩父の尾根を谷を峠を高原を歩いた私は過去の楽しい思い出とこの新しい地圖とをルックザックにいて、上越の山に人氣を稍奪はれたかの感がないでもない奥秩父へまた歩きたいと思ふ。(藤島)

五萬分一「四萬」新版

清水トンネルの開通した今日、修正版の發行は大いに期待されてゐた。新しい四萬の地圖を見るに鐵道線は水上驛以北は未だ豫定線のみであるが、湯檜曾のループトンネルの位置も明瞭である。湯檜曾附近の鐵道沿線の地形は多少修正されてゐる。土合や湯檜曾、赤谷川方面の人家の符號に變化が見える。清水越の大道が小徑となつてゐる。

扱、私達に關係の深い北方の山岳地帯は全く變化がなく、從來のまゝであることは悲觀せざるを得ない。谷川温泉から天神峠への山道も記入されないし、山名の變化も全くない。四萬の發行された以上、近く湯澤圖幅も發行されやう。湯澤の修正版が出版されなければ、完全に上越線の位置も判明しない。そして第二回修正版の發行によつて山々の修正が現れるであらう。その日を待たう。

(角田)

第五十五回小集會通知

来る六月十二日(日曜日)午後一時より赤坂清水谷皆香園に於て開催左記の講演が御座います。
多數御來會を希望致します。
「前穂高岳東面に就て」

「高山の人體に及ぼす影響」

國鹽 研二郎

「高山の人體に及ぼす影響」

渡邊 漸

(司會者 渡邊)



山の消息

北アルプスの便り

新設山小屋

後立山々脈のハツ峯のキレット北方と唐松岳との二個所には七年夏までに新しい小屋が建設される由。共に番人の居る營業小屋であるから今夏からは後立山の縦走も天幕なしで樂々歩ける譯。

案内料金の値下げ

日本アルプス案内人組合の料金は昨年の如き一、二等の差別を廢し、全部日當貳圓、風雨小屋滞在は二割引、穂高一日縦走及び季節外の案内

は三圓と決定。日當の値下げと滞在中の割引の規定は登山者にとつて非常によい事である。
山小屋の宿泊料
大體昨年度の割引が今夏の標準である。

案内日當の値下げ及び割引は結構であるが、もう一つ案内者の小屋宿泊料の割引を切望する。

山案内人遺族救済に就て

曩に常念一ノ澤に於て遭難した不幸なる山案内人の遺族救済に就て、先頃松本市に設立せられた日本アルプス登山案内人共濟會及び日本アルプス協會、信濃山岳會の連名で、過日本會宛左記の通り檄文の送達を受けたが切に會員諸君の同情を乞ふて已まざる次第である。

檄

近年登山家の激増に伴て、遭難の事故が隨て増加したのは、吾人の痛心に堪へぬ所であるが、本年三月末常念岳に於ける遭難の如きは特に酸鼻

の至である。三月二十日有明村案内人塚田清治君は、金光準人、成定喜代治二君を案内して一ノ俣を發し、常念岳附近にて遭難し、其救援に向へる山笠三郎君及案内人中山彦一、高橋益司二君は、雪崩の爲に常念岳乗越下の溪間に壓死したのは、今尙世人の耳目に新なる事柄である。其成定君の談話及同君遭難生存の状況、金光、塚田二君の遺骸並に其遺物等の現状より察するに、塚田君は突如襲來の吹雪を冒して、先づ成定君を安全地帯に移し、尙金光君の爲に其心身の全力を傾盡し、力盡き恨を呑んで遂に其犠牲となりしは歴然として眼に視るが如く、所謂身を捨て、職に殉じたるの跡あるは、同君が平常責任感に強く、着實真摯なる性格を充分に發揮した事が想見されて人をして悚然襟を正さしめるものがあつた。其遭難の急報に接するや、直に來縣の山笠三郎君を案内して救援に向つた中山、高橋等の諸君は、山岳には精通して居り登山の經驗に富み、熟れも優秀なる案内人で、深く義侠の良心に刺激され進んで其任に當つたが、圖らずも急激の大雪山崩の爲に埋没壓死の慘事の際會したのには實に悲慘の極みである。加之此三案内人の中には家庭が物質に恵まれず、遺族たる妻子が一家の大黒柱を失つて饑餓に泣くものもあるのは、誠に同情に堪へぬ事である。

茲に實情を述べて各位の熱誠なる至情に訴ふる事情を諒とせられ、應分の義金を離出せらるゝ様深く屬望する次第である。
昭和七年四月

日本アルプス協會
信濃山岳會
日本アルプス登山案内人共濟會
同 有明支部

義金は左記の處に於いて取扱申すべく何分多少を論せず御同情の程希望致します
松本市新伊勢町(松本驛前)
飯田屋旅館内
日本アルプス登山案内人共濟會
電話特長二十七番

朝鮮山岳會の設立

五月初旬に同會より機關雜誌朝鮮山岳一號の寄贈を受け、初めて朝鮮山岳會の設立された事を知つた。金剛山白頭山の名は屢耳にすることであるが、それ以外に朝鮮にはまだ多くの立派な山々が未開拓のまゝに残されてゐる今日、朝鮮半島の山々を對照とした山岳會が京城に生れた事は慶賀に堪えない。と同時に將來の發展を祈つてゐる。

昨年十月に設立されたもので、發起人は羅南の齊藤龍本、京城の宮島敏雄、加藤要、下出繁雄の四氏、下出氏は本會々員である。七年三月現在の會員數は廿三名。「朝鮮山岳」は隔月發行。

朝鮮山岳創刊號は菊列五十六頁のもので、朝鮮山岳の特徴ある記文が満載されてゐる。寫眞二枚。内容は左の通り

創刊號の巻頭に(中村)朝鮮山岳の創刊を祝す(前田)冬の萬瀑洞溪谷行二篇(下出)冬季鹿盧峯登高(上)(飯山)殘雪の道峯と仁壽峯(仙波)南下石山(齊藤)山の歌(宮島)朝鮮の山三題(中村)冠帽峯と雪嶺(齊藤)山想(中江)金剛山の岩石と鎮床(前田)朝鮮山岳の名稱所在及真高一覽表に就て(宮島)登山の信條(寛)會報 七年四月發行

早春の猿倉小屋より

去る四月七日から十一日まで白馬の猿倉スキー小屋で春の雪を楽しみました。晴、雪隔日位に至り気温は最低凡そプラス二度からマイナス二度の間を往來し晴日は朝はシユタイグアイセンに宜敷き程の硬雪にて日中は水雪となり未だに新降雪多き故にや未だザラメ雪やフィルムクラストの快を味ふことが出来ません。小屋は中々居心地よく附近の森林もスツキリとした良い気分です。雪崩跡(大正九年雪崩跡は既に地名となりし觀あり)白馬尻、小日向山等にスキーを試みましたが殊に良かったの

は小日向の峠を南に越え三次郎澤に降る邊りのカール地形をなす三次郎澤です。景色に剛快味あり廣く勾配よく猿倉を中心としては以上のゲレンデかと思ひます。峠の上には深さ二米程、十數人を入れる雪の窪地ありて温く中食をとることが出来ま

す。小屋の生活は神戸商大山岳部の田中伸三、岸本孝一の二君、高山岳部の弟實、それに我々夫妻、細野の丸山靜男君、小舎番の太田君都合七人の水入らず毎日鬼ばかり食べてゐました。伸三君は小日向、鎗温泉館、拘子、白馬大雪溪降りの日歸りを單獨にてやり、弟は丸山君をつれて拘子に登り新雪の深きになやまされて途中から引き返しました。新雪深く、快晴つどかず、我々はスキーだけで満足し、只今細野に出て、丸山君の家にて之をしたためます。又雪降りになりました。

四月十二日 會員 田中 薫

旅 信

今日インターレーゲン出發此處まで来たが積雪のためユングフラウバインは不通、それに尙盛んに雪が降りてゐて群山の雄姿に接することも出来ず、遺憾ながら當地から引返すことにした。ラッテルアルンネンの峽谷は噂に違はず綺麗な谷だ。

四月十三日

クライネシャイデツクにてチューリッヒからインスブルックに來た。チロールの山間地方は信州のそれによく似て、こゝは差當り信

州高遠といった感じである。

四月十五日 インスブルックにて 下岡 忠一

東北朝日岳

四月廿七日 奥羽線赤湯——鮎貝——日影——頭殿山——朝日嶺。頭殿山より暫くシーにて下る。

廿八日 小雨 午後より鳥原山の小屋に至り泊る。小屋は神社の近くに昨秋新設されたもの、笹小屋にて床なし。水、燃料は手近にあり、冬期も使用に堪へし。附近の積雪量四五尺あり。

廿九日 快晴 午前七時半出發。鳥原山——小朝日——大朝日——中岳——西朝日——往路を戻る。小屋歸着午後四時。尾根は大部分雪に蔽はれたり。登りはシーを擔ぎ、降り

はフィルムクラストをなせるザラメ雪にて壯快なる滑降を楽しめり。春霞にて遠山を望み得ざりしも、西朝日以北、月山方面等みえたり。此の日午後六時半鐘泉に歸へる。

三十日 頭殿山を越え鮎貝に出て、米坂線經由米澤に至り小野川温泉泊 五月一日 曇天小雨 午前八時出發 綱木峠——檜原峠——檜原湖畔——アララギ峠——大鹽峠——午後七時大鹽嶺着——喜多方に出て歸京。同行藤島敏男氏 (田中哲雄)

萬太郎山

二月毛度澤小屋の滞在は吹雪のため山へ登れなかつたので四月の中旬また四日ばかり出掛けた、ところが中の二日土砂降りて閉込められ、小

屋の中で大工仕事に没頭して日を暮らす余儀なくされた。四日目里に下らうと小屋を出ると、みてゐる内に晴れてきたので十一時頃から萬太郎山に登つて歸つた。雪は二月より遙かに多い。萬太郎山頂では雨上りの快晴に素晴らしい眺めがあつた。そして下りは飽きるほど滑つた。

同行角田吉夫氏 (藤島敏男)

白馬のたより 五月九日夜行十日猿倉泊、十一日白馬尻より白馬正面の瘦尾根登攀(神戸商大の田中君初登のコース)快晴雪の状態よく午後二時登頂、十二日吹雪の中を下山、十三日小谷温泉へ、十四日雨飾登山を了る。而して十六日糸魚川より歸京の予定。

五月十五日 小谷温泉にて 冠 松次郎

特製繪葉書頒賣のお知らせ 先日會員諸氏のお手許にお届けしました「山岳」第二十七年第一號の屏繪(きわがさ草・圖案)は、本會會員にして帝國美術院審査員たる石崎光瑞氏の揮毫を煩はしたものを斯界に定評ある高見澤木版製作所に於て製版印刷したのであります。このたびこの屏繪をそのまゝ、別渡日本紙の繪葉書に作らせ實費を以て皆様に

お頒けすることに致しました。山旅のたよりに、日常の通信に、殊に海外への音信にお使ひになれば大變喜ばれることと思ひます。印刷枚數五百枚の盡きない内にお購め下さるやうお勤め申上げます。

一、一枚の單價 金五錢
一、送料 本會負担
一、芝區琴平町一不二屋ビル 日本山岳會圖書室宛申込の事
一、代金は振替又は切手代用(可成二錢又は三錢切手)

會報總込用紙頒賣 會報も大分號數を重ねました。運ればせ乍ら綴込用表紙を作りましたヒラは濃綠色レザー、背は濃紺色クロス、會章を押す。體裁頗る優美

會報の紛失を防ぎ保存に便利です。代金は送料共四十錢。郵券代用で結構ですがなるべく三錢及び二錢の切手で願ひます。御申込は芝區琴平町一不二屋ビル日本山岳會宛に願ひます。 會報 係

原稿募集 山岳 六月十五日迄 會報 六月四日迄 (毎月第一土曜/切)

原稿用紙は御申越次第御送り致します。 會員章をつけて下さい 山に登られる時 小集會に出席される時 集會室圖書室に來室される時 會員章をつけて下さい

昭和七年五月三十日印刷
昭和七年五月一日發行
發行所 日本山岳會
編輯所 角田 吉夫
（所別印堂明開）

編會岳山本日・版年二三九一・行刊日十月六

山
日
記

本邦登山團體の最高權威たる日本山岳會の編輯に係る山日記の一九三二年版出來せり。一九三〇年始めて山日記を刊行するや、登山者多年の希望を滿たせるものとして甚大なる歡迎を受け、今や全國登山者の座右に、或は登山に必要欠くべからざるものとなるやの觀あり。

其内容は登山に必要な注意はもとより、登山者の常識として心得べき事項を滿載し、殊に全國山岳地方に於ける山小屋及び山案内組合の記載は本日記の一大特色にして他の企及し得ざる所なりと確信す。始めて山日記の刊行せられてより茲に三年、本年度に至り内容體裁ともに完璧に達したりといふも過言に非ず。本年新たに稿を附加せるもの、全國登山團體名簿、全國營林署及林野局所在地等にして、其の他の部分も改版したるもの頗る多し。

登山期を目前に控へて、山行の計畫に胸を躍らせる登山者諸兄、先づ山日記を購ひ給へ。そは諸兄にとりて何人にも代へ難き相談相手となるべし。

編及 伊藤秀五郎 浦松佐美太郎 神谷 恭
編輯 木暮理太郎 黒田 正夫 武田 久吉
委筆 田中 菅雄 角田 吉夫 藤島 敏男
員者 榎 有恒 松方 三郎 渡邊 漸

内 容 (全編新稿)

菊半截三七〇頁
海老茶クロース装
定 價 金 壹 圓
送 料 六 錢

曆、自由日記欄

登山經歷欄、住所欄

登山の注意

冬期登山、雪崩

服裝と用具

登山衛生

山岳高度表(本邦及外國)

峠高度表(本邦及外國)

山小屋・山案内

登山日程表

(日本アルプス、秩父上越國境)

(東京を中心とするもの)

山岳語彙(日本及外國)

山岳文獻抄

營林署、帝室林野局所在地

全國登山團體名簿

度量衡、郵便規定

地圖區劃一覽表

山岳寫真八葉(武田久吉氏撮影)

其 他

東京市神田區駿河臺

北甲賀町四番地

梓 書 房

電話 神田二七五番

振替東京七八四四番

山

の

本

登山家の至寶

ALPINE
JOURNAL

Volume 1—39
(1863—1927)

with

Collective Index
(Bound & Unbound)

Complete Sets

Price.....¥ 500.00

東京・日本橋・通二

丸善株式會社

東京=神田・三田・早稲田・丸ビル

大 神 京 名
阪 戸 都 古
屋

横 福 仙 札
濱 岡 臺 幌
城

カメツトは征服された!

Kamet

Conquered

by F. S. Smythe
with an
Introduction

by

Sir F. Younghusband
with 48 Plates
1932

近々刊出の豫定

price...about ¥ 8.80

The

Kangchenjunga
Adventure

by F. S. Smythe

Price.....¥ 8.80

Bauer, P.- Im Kampf um den Himalaja. '31.....¥ 5.15
Filippi, C. F. de.- Himalaya, Karakorum and Chinese Turkestan. Tr. from the Italian. '32.....(近著)
Hill, R. W.- The Art of Mountain Tramping. '32.....4.65
Muller, E.- They Climbed the Alps. '30.....5.75
Noel, C. J.- The Story of Everest. '31.....3.00
Palmer, W. T.- The Art of Camping. '32.....(近著)
Robbins, L. H.- Mountains and Men. '31.....9.00
Schmithals, Huns. (Hrsg.) von Die Alpen. '32.....22.50
Simon, C.- Erlebnisse und Gedanken. '32.....5.70
Trenker, L.- Meine Berge. '31.....3.60
Younghusband, F.- The Epic of Mount Everest. '31.....1.35